

東京芸術祭2018芸術オータムセレクション

ゲゲゲの先生へ

原案:水木しげる 脚本・演出:前川知大

水木しげる × 前川知大 “奇怪ダブル”の興奮

怪奇漫画の巨匠、水木しげるの世界に、
前川知大が着手。その人生観、
作品に込めたメッセージを丁寧にすくい上げた、
オリジナルストーリーの誕生だ。

いつしか影響され、近づいていった創作の視点

主宰する劇団イキウメを中心に、超常の出来事に焦点を合わせ、作品を発表し続けている劇作家・演出家の前川知大。胸騒ぎを誘うSF的世界観で観客を魅了する彼と、漫画家・水木しげるとの結びつきは、極めて必然に感じられる。「自分が多大な影響を受けてきたものについて題材にしようと思っていた」と語る前川に、水木作品との不思議な縁について聞いた。

「家に水木先生の本『妖怪大百科』があって、それを小学生の頃から目にしていました。自然と先生の描いた妖怪たちを身近に感じていました。今回の上演のために未読の作品や自伝のエッセイなどをまとめて読んでいくなかで、先生のお人柄にあらためて興味を持ちましたね。戦争に行った際、戦地の島の人たちと仲良くなって、その素朴な生活様式に感銘を受けた。“人間はこうあるべき”と感じて戦後、日本に戻って暮らすけれど、故郷の風景はどんどん変化して行って…。

先生はいわゆる文明批判を込めて、逆説的に“都市が自然によって破壊される”といった内容の漫画を多く描かれているんですね。で、よく考えてみたら自分もそういったモチーフで、自然によって都市の文明が一回引き戻されるといった作品を、イキウメで書いてきているなど。絶対に僕がどこかで影響を受けて、勝手に近づいていったように思うんです」

近未来に現れた、ねずみ男が見た日本とは

前川が最も共感を覚えたのは、水木が本来抱いていた「妖怪の姿は本当は見えない。ただ感じるもの」とする価値観だという。「見えなくても存在することを皆に伝えるために、絵描きである自分の使命として、形にしよう。それで柳田國男の『妖怪談義』や鳥山石燕の妖怪画を参考にして、妖怪キャラクターを生み出した。その考え方は本当にすごいなと思う」と、自身の作劇にも通じる思考に強くなずく。今回の『ゲゲゲの先生へ』も、その“見えないもの”への熱い思いを核に、水木の短編作品やエッセイからエピソードを抽出して書き下ろした物語だ。

「水木先生の一番好きだったキャラクター、ねずみ男が主人公です。ねずみ男は人間と妖怪の間に生まれた“半妖怪”で、本作では根津という男になって佐々木蔵之介さんが演じます。設定は今から30年後、平成60年の、もう妖怪が住めない世界になってしまった日本。語り部となる根津の、過去の回想



から現れた妖怪たちが、もう一度、自分たちの生きる場所を取り戻すべく立ち上がろうとするんですね」

見えないけれど存在するものへの畏怖

キャストには、早くから前川ワールドに心酔し、その確かな演技力でともに『抜け穴の会議室』や『スーパー歌舞伎II 空ヲ刻ム者』などの舞台作りを重ねてきた佐々木蔵之介を筆頭に、清澄と妖艶、両方の美を兼ね備えて映像のみならず話題の舞台に立ち続ける実力派、松雪泰子。若き勢いに期待のかかる新鋭、水田航生と水上京香。唯一無二の個性と実力で深い味わいを残す巧者、手塚とおると池谷のぶえ。そして浜田信也、盛隆二、森下創、大窪人衛のイキウメ精鋭陣。さらにはライフワークとしていた怪奇朗読劇『百物語シリーズ』を完走し、圧倒的な存在感で観客を吸引する白石加代子まで、水木×前川の“奇怪ダブル”に立ち向かうに不足のない、最高の布陣が整った。怖れと興奮が交錯する、演劇でしか味わえない新たな“水木しげるの世界”。五感、いや第六感までも尖らせて、目撃してほしい。

「舞台上の暗闇の中にも何かがある…、そんな感覚だけでもお客さんには持ち帰ってもらえたら。恐怖というよりは、畏怖。恐れ多いという感覚ですね。人間だけがこの世界を好きに作り変えていいわけじゃない。自然や、自分たちとは違う存在に対する畏怖の心を忘れないでほしいなど。そんな舞台にできたら、たぶん水木先生にも怒られないだろうと思います(笑)」

取材・文:上野紀子(演劇ライター)

10月8日(月・祝)～21日(日) プレイハウス 詳細はP9へ

原案:水木しげる 脚本・演出:前川知大
出演:佐々木蔵之介 松雪泰子 水田航生 水上京香
手塚とおる 池谷のぶえ 浜田信也 盛隆二
森下創 大窪人衛 白石加代子

松本、大阪、豊橋、宮崎、北九州、新潟公演あり
特設サイト www.gegege-sensei.jp



前川知大

RootS Series

書を捨てよ町へ出よう

作:寺山修司 上演台本・演出:藤田貴大(マームとジブシー)

没後35年を迎えた今、 再び寺山修司に挑む

マームとジブシーを主宰する演劇作家・藤田貴大が、
寺山修司『書を捨てよ町へ出よう』を再び上演する。
3年のときを経て、上演に向けた新たな構想を語る。

パリ公演を見据え、寺山作品を再演する

藤田が『書を捨てよ町へ出よう』を舞台化したのは2015年のこと。その当時から、いつかこの作品をパリで上演したいと考えていたのだと藤田は振り返る。その背景には、公演直前に起きたパリ同時多発テロ事件がある。そこでターゲットとされた場所の一つは劇場だった。

「他の作品であれば再演することに慎重な部分もあるんですけど、この作品に関しては初演の段階から再演のしがいがあるなと思っていたんです。あのときは主人公の『私』がライフルを構えているシーンから始まって、その目に涙が浮かんでいる——それをパリで上演すると、全然違うモチーフが生まれるんじゃないかと思ったんですよ」

3年ぶりの再演となる今作は、10月に東京芸術劇場で上演したのち、上田、三沢、札幌、パリを巡演する。海外公演を想定して藤田がクリエイションに挑むのは、2013年の『てんとてんを、むすぶせん。』からなる、立体。そのなかに、つまっている、いくつもの。ことなつた、世界。および、ひかりについて。』以来だ。それは彼らにとって初めての海外公演だった。

「『てんとてん〜』という作品は、世界中のどこの町でもありうる出来事を描いていたんですけど、それを『書を捨てよ町へ出よう』で描けたらと思っています。アメリカってものに抗おうとして、それでも結果的に受け入れざるをえないという挫折感を抱えた若者たちがいる——その響が今のヨーロッパでどう響くのか、興味がありますね」

70年代の新宿、その細部に宿るざらつき

再演にあたって藤田が意識するのは、寺山修司が『書を捨てよ町へ出よう』を発表した1970年前後の新宿だという。

「これは昭和感を出したいってことではないんですけど、平成が終わる今、昭和の新宿を描いてみると、もしかしたら海外に通用する部分があるんじゃないかと漠然と思っている部分もあるんです。初演のときは昭和臭さみたいなものを排除し過ぎていた気がするんですけど、細かいディティールにこそ、主人公の『私』が抱えたざらつきがあると思うんですよ」

初演のときにキーワードとなっていたのは「コラージュ」だった。一見すると脈絡がないようにも思えるシーンが並列された映画版『書を捨てよ町へ出よう』を観た藤田は、「自分のほうがうまくコラージュできる」と豪語し、すべてのシーンを一度解体し再編集した。あれから3年経った今、「あのときは



イラストレーション:宇野由貴典 A.O.:丸丸みづ子 撮影:村上浩治

ちょっと乱暴だったかも」と藤田は笑う。

「これまで僕は、物語っていうことを嫌がっていたんだと思うんです。寺山さんの映画も、ポストドラマというよりポストストーリーで、物語ることに唾を吐いている部分がある。だから『書を捨てよ町へ出よう』にもほとんどストーリーはないけど、そこを僕が補ってもいいのかなと思っていて。たとえば何かを殺すシーンがあったとして、新宿のどこで殺すのか、何で殺すのかをストーリーで補うことで、全然手触りが違うと思うんですよ」

長過ぎる人生を、演劇で立ち止まる

藤田は7月にプレイハウスで新作『BOAT』を上演したばかりだ。そのエピソードでは「ただ、時代だけが存在するのだった」という台詞が語られていた。寺山修司が時代と格闘したように、藤田も常に時代を意識して作品を描き続けている。毎日のように悲惨なニュースが溢れる今、演劇に何が可能かと自問自答を繰り返す。

「最近、人生って長過ぎるなと思うことがあるんです。禍々しい事件が起こるたびに嫌悪感を抱くんだけど、それと同時に『この犯人はものすごく暇だったんだな』とも思う。ある事件のために道具を準備して、計画を練って——それは暇じゃないと実行できないですよ。それで言うと、劇場に足を運ぶってことも時間に余裕がないとできないことだけど、長過ぎる時間をどう消費するかってときに、演劇を観るっていう立ち止まり方をしてくれる人がいる。それが僕にとって唯一の希望なんですよ」

取材・文:橋本倫史(ライター)

10月7日(日)～21日(日) シアターイースト

詳細はP9へ

作:寺山修司 上演台本・演出:藤田貴大(マームとジブシー)
出演:佐藤緋美 青柳いづみ 川崎ゆり子 佐々木美奈 召田実子
石井亮介 尾野島慎太郎 辻本達也 中島広隆 波佐谷聡 船津健太
山本達久
映像出演:穂村弘(歌人) 又吉直樹(芸人) 佐々木英明(詩人)

パリ公演 ～ジャポニスム2018公式公演～

11月21日(水)～24日(土) パリ日本文化会館 ※フランス語字幕あり

上田、三沢、札幌公演あり 特設サイト www.geigeki-fujita2018.com

東京芸術祭2018 芸術オータムセレクション
バック・トゥ・バック・シアター
スモール・メタル・オブジェクト
 演出:ブルース・グラッドウィン

人間の「生産性」について問うユニークな市街劇

世界中で話題を振りまいているオーストラリアのバック・トゥ・バック・シアターが、5年ぶりにやって来る。『スモール・メタル・オブジェクト』は、その名の通り「小さな金属性のモノ」にすぎない「お金」に執着し、振り回され、個の尊厳さえ踏みにじる人間というものを、現実の人混みの中で見つめてみるという、シニカルでハプニング性に富む仕掛けがほどこされた人気作だ。

日常のモヤモヤを抱えるスティーブに、友人のゲイリーが「いい話」を持ちかけたことから、2人は、大金を動かすエリート気取りの人物たちの、切迫した取引に巻き込まれる——。知的障害を持つとされる俳優たちと、彼らが置かれた状況を共有しながら創作されるドラマは、ほんわかしたユーモアを保ちながら、虚を突くように社会の偽善に鋭く斬り込む市街劇だ。今回舞台となるのは、東京芸術劇場前の池袋西口公園。観客は、雑踏に紛れて怪しげな



©Jeff Budy

やり取りを展開する彼らの会話をヘッドフォン越しに聞きながら、公園を歩き交う人たちが彼らに向けた視線ごと、その現場を観察する。何でも起こりそうな池袋の街中で、果たしてスティーブとゲイリーの安全は守られるのだろうか!?

文:伊達なつめ(演劇ジャーナリスト)

10月20日(土)~29日(月) 池袋西口公園 詳細はHPへ
 演出:ブルース・グラッドウィン
 出演:サイモン・ラフティ ソニア・テューベン ほか
 料金:[全席自由]一般・前売 3,000円ほか(ヘッドフォン付) ※対象年齢15歳以上

芸術dance
田中泯
—オドリに惚れちゃって!—「形の冒険」

ダンサー田中泯のドキュメンタリー映画を製作中の
 犬童一心監督による特別寄稿

永遠のインデペンデント

2004年『黄泉がえり』という作品で、日本アカデミー賞の会場にいた。『メゾン・ド・ヒミコ』の準備中だった私は、伝説的なゲイバーのマダム、ヒミコのキャスティングに苦慮していた……。ふと、顔を上げると、二つ置いた、先のテーブルに座る男性が目止まる。ページュのスーツにノーネクタイ、ひっそりと肩を落としてうつぶわいている。私は目が離せなくなった。この人ならヒミコができる、とすぐに思った。が、その静穏な佇まいから俳優とは思えず、何かの関係者だと思いついた。ああ、どうしよう、とっていると、「次のプレゼンターは昨年、『たそがれ清兵衛』で最優秀助演男優賞を受賞された田中泯さんです」「えっ、うそ」私は動揺する。

脚本を気に入ってくれ、初めて会った日、泯さんは言った。「僕は、演技ができません。ただ、そこに、一生懸命いることはできます。それでも良いですか?」この最初の言葉こそ今思えば田中泯の多くを語っていると思う。



©Toshie Tomiyaga

今、私は泯さんのドキュメンタリーを作りつつある。去年のポルトガルから始まり、その踊りを随分と撮影した。泯さんは、「舞踏」の踊り手ではない。自分の踊りをただ「踊り」だという。何のジャンルにも属さない永遠のインデペンデント。だから自由。今、私は、自由を必死に追っている。タイトルは『名付けようのない踊り』。フランスの哲学者ロジェ・カイヨワ氏が泯さんの踊りを見たときの感想からいただいた。彼は、泯さんに言った。「永遠に名付けようのない踊りを続けてください」

文:犬童一心(映画監督)

11月23日(金・祝)~25日(日) シアターイースト 詳細はP12へ
 出演:田中泯

芸術dance
勅使川原三郎
「月に憑かれたピエロ」 「抒情組曲」

ダンスと音楽の刺激的なコラボレーション

勅使川原三郎のダンスを見ること、それは唯一無二の美的体験だ。身体速度と重心を精妙に操作して空間を自在に変容させる舞踊はもちろん、自身で照明、美術も手掛け、選曲にもこだわり、ノイズ、クラシック、笙の調べから完全な無音まで、あらゆる音に挑み、勅使川原は舞踊の地平を拡張してきた。今回は、アルノルト・シェーンベルクの歌曲『月に憑かれたピエロ』(1912)と、アルバン・ベルクの弦楽四重奏曲『抒情組曲』(1925-26)で踊る。

「月に憑かれたピエロ」とは、19世紀にヨーロッパのバントマイム劇で流行した主題。月(狂気の隠喩)に魅入られたピエロの幻想を語る詩を、朗読と歌唱を混ぜた独特の歌唱法で歌う、驚くほど前衛的な楽曲だ。CDもリリースし、この作品で特に高い評価を誇るソプラノ歌手マリアヌ・プスールが、本上演のために来日。2011年のラ・フォル・ジュルネで観客を圧倒した歌声と

12月1日(土)~4日(火) プレイハウス 詳細はP13へ
 演出:振付・照明・美術・衣装:勅使川原三郎
 出演:勅使川原三郎、佐東利穂子(ダンス) マリアヌ・プスール(歌) ハイメ・ウォルフソン(指揮) 多久潤一郎(フルート) 岩瀬龍太(クラリネット) 田口真理子(ピアノ) 松岡麻衣子、甲斐史子(ヴァイオリン) 般若佳子(ヴィオラ) 山澤慧(チェロ)



photo by Akihito Abe

ダンスとの対峙が、再びスリリングな美を生み出すに違いない。『抒情組曲』は新作ダンス。楽曲は1920年代にシェーンベルクが完成させた12音技法を用いるが、ワーグナーの一節やボードレールの詩の引用を行い、至高の美の理想と醜悪な現実の間で引き裂かれた19世紀の時代意識を共有する。この2作品の絶妙な取り合わせにも期待が高まる。

両曲とも、出演は勅使川原と佐東利穂子。勅使川原のメソッドを身に付け、近年新たな段階へ進む佐東は、年初に平成29年度(第68回)芸術選奨文部科学大臣賞、日本ダンスフォーラム賞を受賞した、いま最も見逃せないダンサー。音楽ファン、ダンスファン、そして現代美術ファンも、五感を刺激される必見の舞台だ。

文:岡見さえ(舞踊評論家)

詳細はP13へ

COMING UP NEXT 2019. 1-3

演劇・ダンス ラインナップ

1月 シアターイースト
 芸術+トーク
朗読「東京」

2月2日(土)~2月24日(日)
 シアターイースト
「Le Père 父」
 作:フロリアン・ゼレール
 演出:ラディスラス・ショラー



2月7日(木)~10日(日)
 シアターウエスト
 芸術dance
ニブロール
「悲劇のヒロイン」
 作・演出:振付:矢内原美邦

2月27日(水)~3月10日(日)
 シアターイースト
 芸術eyes
ブス会*
「エーデルワイス」
 作・演出:ペヤンヌマキ

3月8日(金)・9日(土)
 コンサートホール
ダンス・コンサート
「スターズ・イン・ブルー」

2月24日(日)~3月17日(日)
 プレイハウス
「世界は一人(仮)」
 作・演出:岩井秀人

3月
 シアターイースト
 芸術eyes
ベッド&メイキングス
「こそぎ落としの明け暮れ」
 作・演出:福原充則



撮影: Michael Poehn